

## P-337

## 高齢心不全末期患者の自宅退院への関わり～最期まで自分らしくありたい～

那須赤十字病院 看護部<sup>1)</sup>、診療部<sup>2)</sup>、リハビリテーション科<sup>3)</sup>○ことう後藤 じゅんこ純子<sup>1)</sup>、加藤 久賀<sup>1)</sup>、益子みどり<sup>1)</sup>、菊池 範江<sup>1)</sup>、  
景山 倫也<sup>2)</sup>、益子 寛人<sup>3)</sup>

【はじめに】新型コロナウイルス肺炎の流行により面会禁止となった療養環境は患者にとって闘病意欲の低下や孤独、不安をさらに増大させる要因と考える。今回、高齢心不全末期患者がコロナ禍の中、自身の最期を自分らしく迎えられるよう限られた時間の中で、多職種と連携し自宅退院を叶える事ができた事例を報告する。

【事例紹介】Aさん90代女性、慢性心不全末期。家族構成：6人家族、要介護2、入院前までは家事全般を担っていた。入院時よりNPPV装着、翌日には離脱する。第5病日に胆嚢炎と診断されるが侵襲的な治療は希望されず経過観察となる。長期臥床、絶食からせん妄や廃用症状が進行し症状が悪化するなか本人の「家族に料理を作ってくれたい」との思いを叶えたいと家族より自宅退院を希望されたが、退院当日に病状が悪化する。移動中の急変のリスクがあり病院での看取りへ変更となるが同日、病状は悪化しながらも会話可能、循環動態に変動ないため自宅退院を決定した。

【結果】Aさんは退院して3日後に自宅でご家族に見守られながら永眠された。家族よりAさんと自宅で過ごした3日間は有意義であり最もAさんらしい最期を迎えられたとのことであった。

【まとめ】コロナ禍で家族の面会も制限され患者・家族の思いに寄り添うことが難しいなか患者・家族の希望を叶えたいの思いから医療スタッフ、在宅支援チームが1つになって自宅に退院させることができた。最期までその人らしく患者の尊厳を守るために医療、看護を提供する事の大切さを改めて学んだ事例であった。

## P-339

## レバノンにおけるパレスチナ赤新月社医療支援事業での事業管理委員の活動

大阪赤十字病院

○かたやま片山 たまみ珠、池田 載子、光森 健二、中出 雅治

日本赤十字社（以下、日赤）はパレスチナ赤新月社（以下、PRCS）との二国間協定のもと、2018年からPRCSがレバノン国内で運営する5つの病院に対する支援事業を行っている。コロナ禍では要員派遣を中断しオンラインでの支援を続けていたが、2022年4月から3か年計画に基づく第二期事業を開始し、日赤要員の現地活動を再開した。第二期事業の前半にあたる1年半は、レバノン北部にあるサファッド病院に介入し、医師1名、看護師2名からなる医療チームのメンバーを随時ローテーションで回しながら、病院スタッフに対する技術移転を行ってきた。報告者は、2022年12月から2023年5月までの半年間、当該事業の事業管理委員として現地で活動した。院外では主に各カウンターパートとの調整や連携、事業予算や進捗管理といった事業全般にかかると業務に従事しつつ、院内では病院スタッフによるモニタリング体制の構築やデータ管理、啓蒙活動のサポートなど、医療チームの活動定着化に向けた直接的な支援活動にも携わった。病院支援事業における事務的介入の可能性や課題を含め、詳細について本発表にて報告する。

## P-341

## PM理論を活用した現地スタッフへのアプローチー国際医療救援活動報告ー

福岡赤十字病院

○まえざわ前澤 ゆみ裕未

【はじめに】日本赤十字社は中東レバノン共和国のパレスチナ難民及び脆弱な地域住民に対する医療サービスの質が向上することを目標とし、パレスチナ赤新月社医療支援事業を行っており、私は初派遣のスタッフ看護師として第二期の活動に参加した。今回、活動の中で、現地スタッフが主体的に関わり、事業が円滑に実行できるように、PM理論に基づきリーダーの役割を分担し、実践した活動について報告する。

【活動報告】A病院の活動部署の1つにて、主体的に事業を進める役割を担った。シニアと相談し、現地スタッフの中でリーダーシップのある看護師長(以下A氏)をフォークロマンと定め、PM理論を用いて自分とA氏のリーダーシップを分担することを計画した。PM理論における「P目標達成機能」(Performance)と「M集団維持機能」(Maintenance)の機能は通常、1人のリーダーが担う機能であり、個々のリーダーシップ像の違いにおいて、どちらかに偏る傾向がある。私自身が目標達成機能のPの役割を担い、現地スタッフとのコミュニケーションが良好であるA氏が集団維持機能のMの役割を担うことで、PM両方の機能を強化し、チームビルディング・目標達成・組織の強化に高い意識を持つリーダーを形成し、事業が円滑に進むことを期待した。P機能は活動の中で徐々にA氏に委譲していく計画とした。自身の現状把握や語学力不足により、活動内容の認識の統一に時間を要したが、チームメンバーからの支援を受け、話し合いを重ね、協働することで、認識を統一し、活動を行うことができた。

【おわりに】PM理論を用いて、リーダー機能を現地スタッフと役割分担し、PM両方の機能を強化を行い、お互いのリーダーシップを発揮できる体制を整えることで、現地スタッフの主体的な活動を促し、事業を円滑に実行することができたと考える。

## P-338

## 連盟主催ユース活動支援を活用した感染症による差別をなくすための絵本作成

日本赤十字社京都府支部 事業推進課

○こんた近藤 まつこ松子、松田 聡

【はじめに】新型コロナウイルス感染拡大は、不安や恐れから偏見や差別を引き起こした。日赤京都府支部では、赤十字京都ユース・赤十字奉仕団支部指導講師(A氏)が、学校や市民に講演を行い「私達が考え方や行動を変えれば感染症の差別はなくなります」というメッセージを伝え、多くの共感を呼んだ。この活動を国際赤十字・赤新月社連盟(以後、連盟)の感染症対策等のユース支援プログラム「Limitless」に応募し、第2フェーズまで進むことができた。得られた資金を元に、子ども達へよりわかりやすく伝えるために絵本作成を試みたので、その詳細を報告する。

【内容】活動内容を紹介したエンターテインメント動画を提出し、2021年9月第1フェーズを通過した。その後、連盟から、獲得した資金用途の質問があり、子ども達と保護者への啓発に向けた絵本作成のビデオを提出した。2022年4月第2フェーズを通過した。当初の応募は700チームであったが、通過は60チームであった。絵本全体の構成、挿絵はA氏と支部職員が行い「げんきなこころとげんきなからだ」の試作品が完成した。連盟からは適宜助言があり、保育士による園児への読み聞かせや青少年赤十字加盟小学校2年生に授業を行い、児童の感想、保育士、教師からの助言を元に修正を行った。第3フェーズは通過できなかったが、得られた資金3,000スイスフランを元に絵本70冊が出来上がった。絵本については新聞でも紹介され、早速、保育園等から問い合わせがきている。児童からは「心と体がつながっていることがわかった」といった感想があった。

【おわりに】今回、「Limitless」に参加することで、連盟の意見を参考に保育園児への読み聞かせや小学校での授業を通じ内容を修正するとともに、資金を元に絵本作成することができた。感染症による差別をなくすため、絵本を広めていきたい。

## P-340

## トルコ・シリア地震 ロジスティクスのチャレンジ

大阪赤十字病院

○かわい河合 けんすけ謙佑、仲里泰太郎、中出 雅治

【背景】2023年2月6日、トルコ南東部のシリアとの国境付近で発生したマグニチュード7.8の地震とその後も続いたマグニチュード7クラスの余震により、数十万の建物が損壊し、トルコ、シリア両国を合わせて6万人以上が犠牲となる甚大な被害が発生した。日本赤十字社は国際赤十字赤新月社連盟と各国赤十字社と連携し、シリアへ病院型ERUの派遣を検討、このうち手術モジュールの資機材を日本赤十字社から提供する段取りを進めた。この段取りにおいて発生したロジスティクスのチャレンジを紹介する。

【資機材の現状】日本赤十字社の病院型ERUの資機材は大阪、名古屋、熊本に保管しており、その多くが大阪にある。病院は複数のモジュールで構成されており、資機材もそれぞれモジュールごとに木箱などで梱包されている。

【チャレンジ1】資機材はモジュールごとに梱包されているが、全資機材を一度に搬出することを前提としている。また、梱包の都合上、資機材によっては他のモジュールと混載して梱包しているものもある。その結果、手術モジュールのみを大阪から搬出するとしたら、資機材の選定や再梱包が発生することになる。また、パッキングリストもこれら変更に応じて再作成する必要がある。

【チャレンジ2】資機材は一斉に輸送することを前提にモジュール化、梱包されているため、チャレンジ1に応じるうえで準備時間、ロジスティクスに要する費用、資機材の必要性と廃棄、輸送効率、木箱内のスペース、資機材の残期限などを総合的に検討し、最良の手段を選択する必要がある。

【チャレンジ3】日本では外国為替及び外国貿易法に基づいて安全保障貿易管理を実施しており、シリアは厳格に輸出管理が実施されている輸出先国の一つに該当している。

## P-342

## 武蔵野赤十字病院での産婦人科研修を基盤に参加したトルコ地震国際救援

武蔵野赤十字病院

○ほり堀 さとし智志、高野みずき、塚本可奈子、小林 織恵、田村 和也、  
梅澤 聡

著者は、救急科専門医を取得し救急医療に従事していたが、国際救援活動の中で周産期部門の需要が大きいことを知り、産婦人科医療を学ぶことを志した。救急医としての経験は10年あったが、基礎から学ぶために、産婦人科専攻医として受け入れ先を探し、自分の希望を理解してくれる武蔵野赤十字病院で、2020年4月より研修を開始した。2023年2月6日トルコ・シリア地震が発生し、日本国外務省は国際緊急援助隊の派遣を決定した。著者は、2023年2月12日から24日まで国際緊急援助隊医療チーム第一陣で、被災国では、被災地の病院を支援する形で野戦病院を展開し、外来診療と救急車の受け入れを行った。派遣期間中の患者数は786人であった。救急車の受け入れは5例(2例は直接搬入)で心肺停止が2例(1例は交通外傷による心肺停止)、急性呼吸不全が1例、外傷が2例であった。産婦人科関連症例が約40例で、分娩管理が1例であった。今回の派遣は、Emergency medical teams Type2として、外来診療だけでなく手術・分娩・入院の機能を要しての初めての派遣であった。そのため、救急科と産婦人科のダブルボードの経験が選考の要因であったと考えられた。主に急性期一連急性期の活動で、救急医として外来診療と救急車の受け入れを行い、産婦人科医として妊婦健診など行うことができた。災害時、特に急性期には幅広い診療が求められるため、複数の専門性を有していることは大きなメリットであり、今回の派遣ではそれぞれの分野で専門性を生かした活動は、広い視野で自分の考えに共感し、受け入れてくれた武蔵野赤十字病院での研修が基盤にあったからである。今後は、日本赤十字の国際救援活動にも参加したいと考えている。

11月10日(金)  
一般演題(ポスター)

抄録